

済心塚

仁和寺の参拝客が、二王門をくぐり中門に向かって歩いていくと、右手に松に覆われた古墳があるのに気づくでしょう。この地には、仁和寺の第2代住職・性信親王（1005-1085年）の師であり、京都の文化の隆盛期に宮中で大きな影響力を発揮した僧侶、済心（954-1030年）が祀られています。済心は、高位の公家である源雅信（920-993年）の息子で、当時の朝廷や貴族に好まれた仏教の2宗派のうちひとつである密教真言宗の僧侶でした。彼は、京都最古の寺院であり当時の真言宗の総本山であった東寺でいくつかの要職を務めるなど、僧職を歴任しました。済心は、最終的に彼の宗派の長に任命され、1020年には、通常は御所の門に車を置いていく必要があるところ、僧侶としては異例の、牛車に乗って御所の内部まで入る権利を与えられました。済心塚は古墳のような形をしていますが、済心の遺骨は入っていないと考えられています。